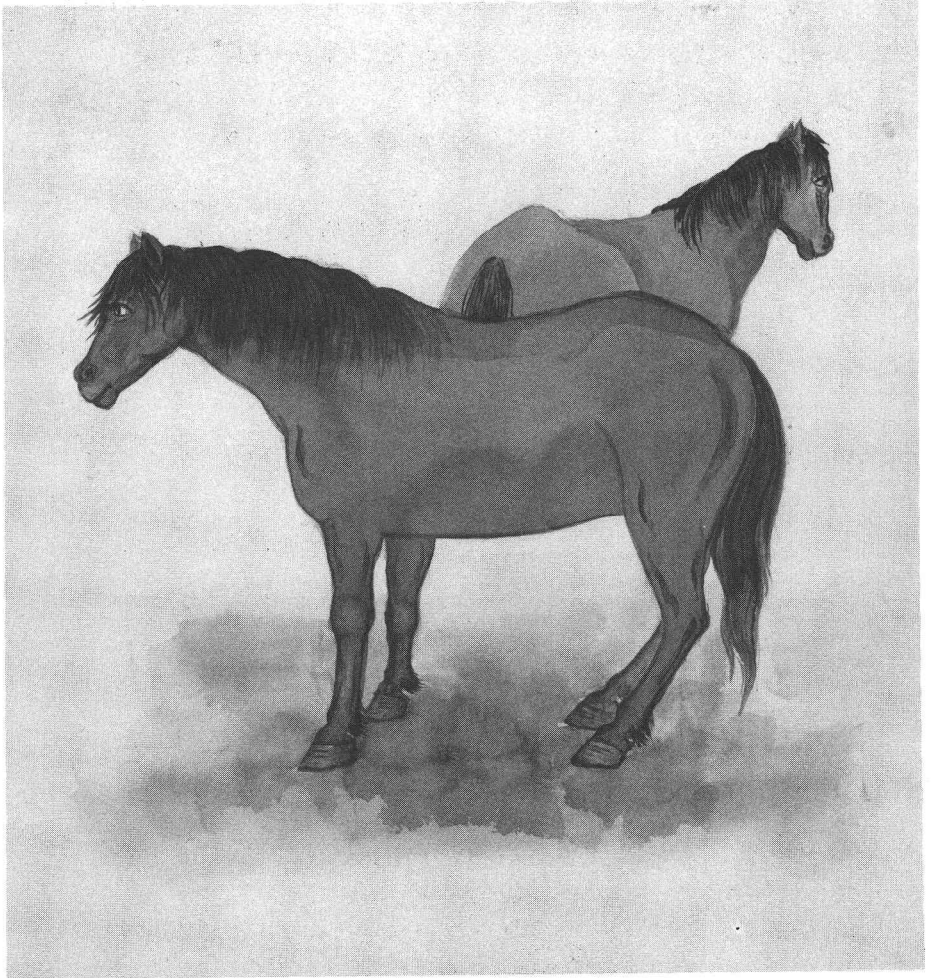


季刊

連句

第29号

平成二年六月一日発行



「暴落」と「じり安」（南柏雜記 27）…………… 1
 風雅考 — 芭蕉遺語をめぐって……………片山多迦夫…………… 2
 おもひ切たる死ぐるひ……………佐藤 廣幸…………… 4
 「鳶の羽も」の巻鑑賞（Ⅷ）……………東 明雅…………… 8
 「蓑虫」付勝練習二十韻……………12

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第三十三回猫蓑会

第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第…………… 14
 二十韻……………捌・文 中川 哲

第二部 二十韻 八卷……………捌 東 明雅 金久保淑子
 馬場 彬風 篠原 達子 蒲原志げ子
 八角 澄子 中田あかり 佛淵 健悟

胼胝は知っている…………… 式田 和子
 — 執筆始末記 —

関口連句教室 歌仙 捌 東 明雅……………21
 遊喜の会 歌仙 捌 中田あかり……………22
 ころも連句会 歌仙 捌 矢崎 藍……………23
 大和路旅行吟 歌仙 膝送り……………24
 柏連句会 二十韻三卷 捌 東 明雅 小林しげと 五十嵐譲介……………25
 白金連句会 捌・文 下鉢 清子……………26
 芭蕉連句に現われる経済のこと……………福井 隆秀……………27
 雁 帛 往 来……………29
 新刊紹介……………18

「暴落」と「じり安」

雅

南 柏 雜 記 27

四月十五日、先師芦丈翁の二十三回忌追善法要をして追善連句会がゆかりの伊那市からむし庵で興行された。主催は芦丈先生愛孫の美紗さんと、現存芦丈門の最先輩でからむし庵連句会代表の宮脇昌三氏。私も御案内を受け参加したが、折しも伊那谷は梅、桃、櫻、辛夷、連翹が真盛りで、まるで桃源郷を行く心地、久しぶりのからむし庵も昔のままで懐しかった。

下に掲げたのは、当日私からむし庵連句会の方々を連衆に捌いた一巻である。追善俳諧の心得については「連句辞典」九〇頁に記載があるが、禁句として「迷う」・「暗い」・「落ちる」・「鬼」・「犬」・「もゆる」・「苦しむ」などがあげられている。これはみな亡き人の冥福を祈る気持ちのあらわれに外ならない。ウ5「じり安の株をかかへて不眠症」は、はじめ「暴落の……」であったが、連衆のお一人に指摘され「落」の字を嫌って、「じり安の……」と改めたものである。芦丈先生直系の連衆であるだけに、流石と感嘆したものである。

半歌仙 故里や 東 明雅 捌

故里や土掘れば土の暖かき

軒に明るき巢燕の声

新入生下宿の部屋の気に入りて

きなこだんごを大皿に盛り

連山の威儀整ひぬ月の影

露しつとりと置ける草むら

秋深き絵島の墓をふし拌み

ブルートレイン放浪の旅

赤蝮舌チヨロチヨロとみやげ店

収賄事件うやむやのまま

じり安の株をかかへて不眠症

神も留守なり呑むジンの味

月と灯が雪と睦める高樓に

己が魅力を知った唇

ふっとまた逢へる予感のイヤリング

ブランコに乗りありったけ漕ぐ

評判の万国博は花盛り

猫も杓子も春風の中

平成二年四月十五日

於 伊那市からむし庵

芦丈仏

明雅

敬一郎

万津子

つる子

友子

恵美子

路代

澄子

同

津

代

郎

る

津

雅

友

風雅考

—— 芭蕉遺語をめぐって ——

片山多迦夫

風雅とは、デモーニッシュなものである。近代の言語では説明し難い日本独自の美的精神構造の如きものであろう。こゝでは、芭蕉遺語を通してわたしなりに風雅について考えてみたい。

句文に風雅と言事忘るべからず。さび・しほり・細み・しほらしきといふは風雅なり。

この心がけなければ、或は平話の句はたゞ事になり、或は無骨、或は野鄙に心賤しく、又道理に落ちて俳諧連歌の本意を失ふ事、道におゐて大切の事ならん。

(山中問答)

俳諧の連歌の本意を失つた作品例は連句年鑑誌上で沢山見ることが出来る。故清水瓢左翁云く、自分の盆の窪は見えないの譬えの通り、自らよしとする大天狗、小天狗が何と多いことか、と。別に俳諧(発句と連句の総称)に限つたことでもあるまいが、悲しい現象である。

玄妙の附

脇を附る時は発句の風情又一しほいさぎよくなるを脇の手がらとするなり。末々に至てもおなじ心なり。五ッ脇の法、七名八鉢の附合など、いふ事はなし。八是等は支考が言ははじめし也(芭蕉伝書集二・北枝考)

瓢左、梅游両師も対吟中つねに、前句の光をかゝげる句後へ渡せる句を附けよと言われた。同じ心であらう。一見して躓くのは、同じ北枝の山中問答に、脇に五ッの附方あれども、是皆附ようの差別にして、趣向を求むにあらずとあって、はたして蕉翁は五ッ脇の法などを説かれたのかどうか迷う点である。わたしの臆測では、この二文は同じ元禄三年の記としても時間的にかんりのズレがあつて、このズレの間に何らかの事情が発生し、敢えて、是等は支考が言ははじめし也」という否定句を挿入したのではないかということである。北枝の三つの文は、山中問答がまず成立して俳諧の理念を示し、次に北枝考で基本的な方法を説き、最後に附方、自他伝に於て初めて実作者のための附合法を案出したものと考えたと論旨が整合してくると思う。

力の筋をつぎし中の子

さゞなみや三井の末寺の跡とりに

高ひくのみに雪の山々

爰へ向ふを附ねば添悪し。手前を附る時ハうち越の手前ゆへ手前の事は甚悪く、向ふ附る時は鳥飛行か、松柏の立木敷、又は月か星成るべし。其中にも月こそ打添の姿情調ひたるべし也。

見つけたり廿九日の月寒き

と向ふをつけたり。此句の外、向ふの姿にして今一句風情よき句有べきにあらず。玄妙の附なるべし。

(芭蕉伝書集二・北枝考)

趙北枝先生は刀劍の研ぎは拔群だが、文を磨くことは不馴れと見えて、之は悪文の見本みたいなもので理解に苦しむ。流石わが九代前の師匠であると言いたくなる。向ふ・手前とは遠近の意ではなく、「向う」は叙景(人情なし)を、「手前」は人情の句を意味するものと解する。これら蕉翁の教えがやがて自他伝に於て、『自・他・場・あしらい』の明快な附合法となつて北枝に結実したと考えると誠に興味深い。

風雅の核

飛花落葉の散りみだるゝもその中にして見とめ、聞とめざれば、おさまるとその活きたる物だに消えて跡なし。物の見へたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし。(三冊子)

何気なく読み過ぎてしまふ平易な言葉であるが、之は蕉翁俳諧一代の獅子吼と思える程の重さをもつて迫ってくる。これほど説き難き風雅の核心を説き得たものも少いだらう。正に物が見えてくるのは見止めてくれることを待っている物があるということである。この核心を踏み外すと、俳諧は単なる遊びに終つてしまふ。『瞬間のうちに消えながら、永遠であるものが実存である』(ヤスパース)とは東西と時代を遙かに隔てた哲学者の語である。

俳諧の行方

日本の詩歌俳諧を代表する三つの選集はそのまゝ、美の姿遷し風雅の歴史を示している。第一に万葉集、第二に古今集、第三に芭蕉七部集である。七部集成成立後三百年の間に光芒を放つものは僅かにホトトギス雑詠選集(明治四十一年から昭和二十年までの虚子選句集)位のものであろうか。多年俳諧すきたる人よりは、外の芸に達したる人、はやくはいかに入る。(宇陀法師)

俳諧は三尺の童にさせよ。(三冊子)

これからの文芸の世界は超近代的なものと今日的なもの相剋し、あらゆる文芸のジャンルがその形を喪つて交錯する乱世の時代ではあるまいか。近代詩に行きつまつた詩人が俳諧にその鬱を紛らしているのはこの前兆である。

今後、映像作家や音楽家、或はジャーナリスト、或はエトランゼ等々との広い風交が必要となるであらう。その拡がりの中で俳諧は崩壊するかもしれないし、逆に新しく俳諧の精神と方法が鍛え直されるかもしれない。マンネリズムと自己満足を日々否定しながら、風雅の魔心の命ずるがまゝに勇ましく進むよりほかないだらう。

口をとおむとすれば、風情胸中をささひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし。(栖去之弁)

(一九九〇年立春の日記す)

おもひ切たる死ぐるひ

佐藤廣幸

いまや別の刀さし出す

せはしげに櫛でかしらをかきちらし

おもひ切たる死ぐるひ見よ

去来
凡兆
史邦

右は『芭蕉七部集』の一つ『猿蓑』の中でも有名な「鶯の羽も」の巻、名残の表八句目から十句目までの特によく知られた三句の涉りで、丁度現在、本誌上で、この巻の明雅先生の名鑑賞が連載され、関西に住む私をも居ながらにして、先生の名講義が拝聴できる仕合せを有難く感謝しております。従って、私如きものが今さらこれに論評を加えることの愚かしさを百も承知しながら、この歌仙については長い間、深い愛着をもって親しんで参りましたので、愚行とは知りつつ、この様な駄文を草しました。この巻の名残の表の一連は既に明雅先生がその名著『芭蕉の恋句』(一五七―一七二頁)の中で実に詳細にわたって委曲を尽して説かれている通り、芭蕉連句中の最大の傑作の、最大のヤマ場として最も光彩を放っている佳処であります。先生が力説されている「逆茂木」は私の頭にしみ込んで離れないほど何度も熟読いたしました。

私は若いころから独りコツコツと幸田露伴の七部集評釈

を便りに、芭蕉の連句の世界を辿っていましたが、そのうちに露伴の解釈に不審な点を幾つか見出し、あきたらなくなり、特にこの巻の「おもひ切たる死ぐるひ」の解釈には直感的に反撥を覚え、無然たる思いを抱き、蕉風連句のよりよき指導者を求め遍歴の旅が続き、それが私を露伴から引離すことになりました。そして遂に東明雅先生の説得力のある優れた鑑賞法に出逢う幸運に恵まれました。先生の鑑賞法は、これまでの注釈者と違い、主観的、印象的解釈を排し、連句の実作体験に基づく追体験による制作心理を大切にしたり、作品の制作と享受が表裏一体をなす、分析的解釈―付心・付味・三句の転じ等―の機微に触れた啓蒙的な懇切な解説は、先生独特のもので、全くその解説には魅了されました。

この「鶯の羽も」の巻の名残の表の一続きは、明雅先生の御指摘通り「人情の句をうまく三句の転じを果しながら」続け、一巻の興を盛り上げる「逆茂木」と称される名場面をつくりその緊迫感がひしひしと身にせまってくるのに反し、露伴の評釈からはそうした高揚した感動は全く伝わらず、ただ史邦の付句の人物を女性とみるか、男性とみるかに迷い、前句の凡兆の「せはしげに」の句を「海道又は

山道のおじやれ飯盛などの「蓮葉女と解し、史邦の付句の「おもひ切たる死ぐるひ」する人物を「思乱れたる女」と、全く軌道を逸脱した解釈に走り、唾然たる感じをいだかせ、「思ひ切たる死ぐるひ」という言葉から下賤な女の破れかぶれな所作を想う様では、露伴の文学者としての資質さえも疑いたくたるとような気持を抱かされました。私にはこの言葉からは中世の猛だけしい戦国の死斗を念頭において行動する武人の姿しか想像できず、余りかけ離れた露伴の解釈に、自分の抱く考ええまっとうなものかどうかをうたがいたくなる疑念さえ生じたほどでした。そこで私はこの「思ひ切たる死にぐるひ」という言葉にどこまでもこだわりの、私の手の届く限りの古注・新注に当って検証することにしました。その頃はまだ、天野雨山の『猿蓑連句評釈』は出版されていず、私が当った注釈書の中で、私の注意を惹いた古注が一つありました。それは岡野湖中の著した『俳諧鷺羽集』（文政九年）の次の条です。「頭をかき散しといふより転じて来て兜下地の髪と思ひよせたり。忍びの緒きりたる討死の立。村上彦四郎、毛受勝助などの俳也。」（勝峯晋風編）でありました。

そこで、私は湖中の挙げた村上彦四郎や毛受勝助という人物がわかれば「思ひ切たる死ぐるひ」という言葉の具体的意味もわかるのではないか。この言葉がどの様に使われていたかがわかれば、この句の人物も自から判明し、露伴説に決着がつけられるであろう。それには先ず、右両人の行実を調べることがこの句を解明する鍵であると考えた。

ところが不思議にも、新注の中にこの湖中の「村上彦四郎・毛受勝助の俳」という言葉に注意を払ったものの全くないことを知ってむしろ私の方が驚いた。湖中の注釈は近代の注釈者からは誰からも全く顧みられず無視されていたのである。そこで私自身が両人の調査から始めることにした。村上彦四郎というのは何処かで聞き覚えのある名である。『太平記』に出てくる村上義光とおよその見当をつけて調べて見ると、これは見事に適中した。吉野山藏王堂の本陣で北条勢の包囲の中から護良親王を脱出させるために、自から着用する物具、鎧を脱ぎ親王のものと取替え、親王の身替りとなり大勢の敵前で壮絶な最期をとげた南朝の忠臣である。

次の毛受勝助となると何時ごろの人物で、何処でどんな働きをした人か全く五里霧中で、その人の名さえ聞いた憶えもなく、何処から手を付けてよいやら全く見当もつかず、その上一番困ったことは肝心の「毛受」という姓の読み方がわからぬことで、これでは人名辞典からもこの人物を探し出すことの不可能なことを悟った。そこで早速図書館へ行き、『難読奇姓辞典』という最適の本を見つけた。この本のお蔭で、「毛受」という姓には、メンジョ、メンジュ、メンケ、メンゾー、モズなどという読み方のあることを知った。そして人名辞典からやつと目的の「めんじゅかつすけ」なる人物の名を探し出すことができた。

毛受勝助は『太閤記』や『豊鑑』にも出てくる人で、柴田勝家に仕える武士で、村上彦四郎よりおよそ二五〇年許

り後の時代の人であった。本能寺の変（一五八二）で織田信長が亡くなり、光秀が秀吉に平らげられ、天下は、信長の重臣の柴田勝家と新興勢力の秀吉の後継争いとなった。この争いが表面化したのが翌天正十一年の賤ヶ岳の合戦である。この合戦は柴田勢に属する前田勢の離反により秀吉方に優利となり、勝家は秀吉勢に追われることになり、越前北の庄に後退を余儀なくされた。勝家が自国に敗退する際、主君の身替りとなり踏み止まり、秀吉軍をあざむくため、勝家の馬標を貰い受け、若くして玉砕して散ったのが毛受勝助である。

こう見てくると水戸藩士であり、芭蕉全集『俳諧一葉集』（文政十年）を初めて完成した、真摯な芭蕉研究家、岡野湖中はこの「思ひ切たる死ぐるひ」という言葉から南朝方の村上彦四郎や柴田勝家の家臣毛受勝助という主君のため一身を投げ出して散った中世の戦国武人を想い、この史邦の付句の主人公を男性と解したことは明白である。兩山もその評釈の中で、「この附句を以って、前句の女の物狂はしき状と誤り解し、七句目のへうき人以下四句すべて女の上なりとし、へ畢竟一句の仕立にのみ苦心して、枝折の工夫未だらざるよりは是の如きを致せるなり」となす如き先註がある。大才芭蕉の捌きを見誤って、神技とも称すべき念々粉骨の作を批難したのは、その因、前句を打越に對するへその人への附と誤解した僅かな蹉跌に原づくのであるが、運移の技法などへの通・不通が、如何に意外な結果を齎すかを語る一例とせられるであらう」と露伴説の不

当を柔かく批難している。そして、凡兆の前句は、去來の打越の「いまや別の刀さし出す」の女性の向付として、刀を受けとり、女に送り出される男性を描いた句で、句中に「櫛でかしらをかきちらし」とあるので、女性の仕草とまぎらわしいが、この運びを仔細に点検すれば、史邦の付句は、前句の凡兆の描いた男性その人の様を描いた人情自の句と見るのが妥当な解釈であることは兩山も指適する通りで、史邦の付句は前句の男性その人の決意を描いた句と見なければこの三句の涉りの首尾は一貫しないことになる。

この辺の付け運びの面白さ、転じの妙は連句特有の楽しさで、江戸期から逆茂木と称され、障害物を引のけ、乗り越えて前進を続ける最大の見せ場であることは前述の通りである。

ところで、私はこの「思ひ切たる死ぐるひ」という言葉は恐らく中世軍記物の世界に出てくるものであろう。きつと『太平記』などに出てくるに違いない用語であろうと見当を付け調べている中に「死狂い」という用語例は、『源平盛衰記』『平家物語』などにも出てくるが、『太平記』には屢々見える常套語のように思えたので、「思ひ切たる」と「死ぐるひ」とが一緒に出て来る用例はないものかと、ひまにまかせて、『太平記』を初めから読みはじめた。私のこの予想は見事に適中して、意外なほど早く、私の目ざした用語例が発見できたときの喜びと驚きは、文字通り私を有頂点にさせた。それは『太平記』巻一、「頼貞回忠事」の条に見出せた。「思ひ切タル者ドモが、死狂ヲセント引

籠タルガコハサニ、内へ切テ入ントスル者モ無ケル處ニ、……」史邦の付句にびつたり符合するような記事である。

私は早速、当時（昭和五十一年）知遇を得ていて、奈良へ転居する前に住んでいた宝塚市の逆瀬川から近い、西宮市の仁川にお住いの甲南大学名誉教授伊藤正雄先生にこのことを御報告した御手紙をさし上げた。伊藤先生の『心中天の網島詳解』（昭和十年刊）は、私の若い頃読んだ最も感銘を受けた良書の一つで、それ以来伊藤先生の名は深く私の頭に刻み込まれていた。その先生が昭和五十一年『俳諧芭蕉連句全解』を出版されたので、当時私には最も信頼のおける芭蕉連句の注釈書として位置づけられ、私のささやかな発見を先ず御報告申上げるのは伊藤先生をおいてほかにないと思った。先生からは折返し御返事を頂き、史邦の付句が『太平記』の巻一の記事を踏まえたことは従来の研究書に見えない新しい発見であるので、何時かの機会をとらえこのことを紹介しようという御趣旨が記されていた。伊藤先生は私が法隆寺に住んでいるところから、或る程度年をとった僧侶のような人物に思われていられたことが、後日伊藤先生をお尋ねしたときのお話から窺えた。伊藤先生はお約束通り、昭和五十二年、甲南大学紀要、文学編29に『芭蕉連句全解』の補正を記され、その中に「二四七頁『おもひ切たる死ぐるひ見よ』の解釈を左の如く訂正する」として史邦の付句を『太平記』の記事を踏えたものであるうとし、私からの通知に対する御丁寧なる謝辞まで記されていたことには大変恐縮した。この補正版に『冬の日』

の「有明の主水」に関する俳誌『獅子吼』掲載の（昭和五十二年二月号）東明雅先生の御論考についての伊藤先生の御紹介と論評を拝見し、その時初めて明雅先生の七部集御研究のことを知り、昭和五十三年の中公新書の『連句入門』の広告を見たときには胸を踊らせた。東先生の『連句入門』が出版されたころの五十三年の七月廿日に伊藤先生が七十歳で逝去されたことを新聞紙上で知りました。

「思ひ切たる死ぐるい」に関する伊藤先生の『太平記』を踏えた句であるという御紹介があつて以降「鳶の羽も」の巻に関し記されたものの中、この句を『太平記』の影響をうけたと認められるものを参考までに次に列挙しておきます。

- ① 昭和五十五年刊、岩波書店「文学」第四十八巻第三号 掲載、山本健吉「余吾の海・路通・芭蕉」（エッセイ）に、『太平記』一、「頼員回忠事」の「思ヒ切ツタル者ドモガ、死狂セント」を引用し、「ことにこの用例を引出したかと思われるほど、符合している。」
- ② 昭和五十八年刊、阿部正美『芭蕉連句抄』第八篇、「この付句の表現に影響したかどうか、後考に備へて書留めておきたい。」

- ③ 昭和五十九年刊、小学館版日本の古典、『芭蕉句集』連句篇、中村俊定、堀切実評註に「一説に『太平記』巻一「頼員回忠事」の中の「思切タル者ドモガ、死狂ヲセント引籠タルガコハサニ……」という多治見一党の決死の出陣の体の故事付という。

私は伊藤正雄先生を介して、東明雅先生の知遇を得られたことを大変奇遇に思い、心より両先生との出逢いを私の生涯の大きな出来事と大切にしております。伊藤先生が昭和二年、東先生が昭和十四年、十二年のへだたりがありますが共に東京帝國大學の国文学科に学ばれ特に近世文学を専攻された奇しき縁を思い、ひとしお深い思いを感じます。尚大先学幸田露伴翁の七部集評釈に対しては常々敬意を

忘れませんが、連句評釈に対し若輩の後学者が生意気なことを口にし、にがにがしく感ぜられる向もあることと思いますが、私がこうした駄文を草することができるとも一重に先学者、先導者がふみかためられた道があつてのことでもまた良き指導者にめぐり逢うことが出来たこともその学恩の一つとして決して忘却してはいけないことを一言申し添えておきたく思います。(一九九〇・一・末)

「鳶の羽も」の巻 鑑賞(Ⅷ)

東明雅

24

瘦骨のまだ起直る力なき

隣をかりて車引こむ

(雑。人情自他半)

凡兆

(現代語訳) 長患いでまだ起直ることもできない病人を見舞いに行かれたが、家が狭くて牛車も入ることができないので、隣りの門の内をしばらく借用して車を引き入れる。(付心) 向付(病人と車に乗った人とを向いあわせて出している)。面影の付(「源氏物語」夕顔の巻。詳細は補説で説明する)。

(付味) 心付(前句と付句とが意味の上でつながりあうもの)で、特に気分・情調の通いあうものはない。「芭蕉連句全解」で伊藤正雄氏は「起直る力なき」の不自由さが、「隣をかりて車引こむ」の窮屈さに響いていると指摘されたが、果していかなるものであろうか。

(転じ) 打越は、ほととぎすが鳴かなくなったという寂寥感を叙べただけの句であるがこの付句は面影付として、はるかに「源氏物語」の世界へ転じている。これは一巻の模様の上からも大きな転じであり、前句の「瘦骨の……」の句を受けていよいよ、この巻のいわゆるヤマ場を迎える

ことになる。

(補説) 浪化宛去来書簡には次のように書かれている。

「『さるみの集』に、『源氏』を下心にふくみたる句(御)ざ候よし、被仰下候。成ほど御目利の通りに、

『隣をかりて』は夕がほ

『待人いれし』はひたちのみや

を存じよせ候句ども、処々に御ざ候。御らん可被遊候。」

これによって、源氏物語夕顔の巻の面影であることははっきりしている。しかし、夕顔の巻をそっくりそのまま取り入れているわけではない。光源氏は幼いころ世話になった大貳の乳母が病になり五条あたりの家に引籠っているのを見舞に行く、しかし、御車を入れるべき門が鎖してあったので、門の開くのを待つ間、はからずも隣の夕顔の花咲く家に若い女性が住んでいるのをかいまみ、夕顔の花にこよせてやりとりがあり、その後、隣りの若い女あるじ(夕顔上)との恋愛が発展するというのが大体の筋であるが、そこには「隣をかりて車を引こむ」ような事実はない。このことについても、去来は前掲の書簡の中で「当流に面影を以て句を付申候事御ざ候。此は、古人の仕たる事を、そのとをりに句に仕候へば、故事にて御座候。其故事とは少ちがひ申候。たとへば、書にも文にもかつてなき事にても、その人の風勢かならず如此なるべき事をおもひよせて仕候」と言っているが、このように「源氏物語」の筋と、この付句の内容の相違は、故事取りの付け方と面影付の付け方の相違になるのである。

25

この句は確かに「恋の呼び出し」(次の付句に恋句を期待し、それを出やすくする句)の句と言うことができるであらうが、それ自身、恋句ではない。

隣をかりて車引こむ

うき人を枳殻垣よりくゞらせん

(雑。恋。人情自他半)

芭蕉

(現代語訳) 久しく見えなかつた恋人が来て、隣をかりて車を引きこんだ。女はあの薄情な男はいつそしめ出して、枳殻垣をくゞらせ痛い目をみせて、思い知らせてやろうとすねている。

(付心) 前句は隣に車を引こむ男。付句は門を閉じて枳殻垣から男を潜らせようとする女。この二つが向いあわせられている「向付」。この句についても「源氏物語」の浮舟の巻、あるいは同じ夕顔の巻に出てくる六条御息所の面影と見る説もあるが、打越から三句同じ「源氏物語」の面影付ということはありません。

(付味) 前句の「車」は牛車であろうし、枳殻垣は貴族の邸であらう。だから、その点で位の付でもある。しかし、その「引こむ」という表現は、何か烈しいものがあり、これに対する「垣よりくゞらせん」にも、平常とは異なるものがある。これは響であり、位の付の調和したものの中に、響きあうものが含まれている。

(転じ) 打越の病態から、これは激しい恋句へと、人物

・境涯・気分ともに一転している。

(補説) うき人は憂き人。薄情な恋人。枳殻垣はからたち(枸橘)を植え並べた垣。そして、枳殻というものの意味は、「芭蕉翁付合集評注」に言っている通り、「さるに垣は竹の垣とも柴の垣ともすべきを、ことにくゞりがたき枳殻垣をくゞらせたるにて、恋のせつなる情みえたり。かつはうき人といふ事によくひゞきたり。まことにくゞ翁の恋句にいたりては、さらに人意の及ぶべき所にあらず」と言っている通りで、枳殻のとげとげした針は、まさに女性すべての瞋恚の象徴なのである。

ところで、この付合は表面では僅かなことしか述べていないが、この情事の始終を想像してみると相当複雑な内容が思いうかべられる。まず、女から閉め出しをくった男はそのあとどうしただろう。それに対して女はいつまでも門を閉じたままだったろうか。どうもそうではなさそうなので、何時、どんなきっかけで門を開け、その後どうなったかなど考えて行くと、優に一篇の小説ぐらいのものがこめられている。そんな複雑なものをこの短い句で描き出し、しかも女性一般に共通するものを枳殻のイメージで象徴したところから、この句のすばらしさがあるう。

26

うき人を枳殻垣よりくゞらせん

いまや別の刀さし出す

(雑。恋。人情自他半)

去来

(現代語訳) 夜が明けるので枳殻垣を潜らせて恋人を帰さねばならぬ。女は名残を惜しみながら今や刀を渡してやる。

(付心) 其人の付。愛人をこれから垣根をくゞらせて帰そうと考えている人の動作を付けたものである。

(付味) 前句・付句ともに緊張した表現である。「七部十寸鏡猿蓑解」は、「刀さし出すと言ふ語声つよく、前のうき人と云る人ののり(調子を合はず意也)」と言っている。

(転じ) 打越・前句の古典の世界から、当代の武家の男女の逢引の場となり、前は恋人の来る景を、今度は帰りの景に見立替をしている。その時刻も前は宵または夜半であったのに、これは後朝で、枳殻の棘も前においては、それを潜らせる女性の瞋恚の象徴であったが、この前句と付句とは、垣の外のきびしい周囲の眼、あるいは世間の眼の象徴になっている。このように、あらゆる点ですばらしい転じが行なわれている。

(補説) この句に対しては、その解釈・鑑賞にいろいろの異説がある。まず、この刀をさし出す人を女性ではなくて、男性と見る説もあるが、刀を帯るのは男性だから、この説は受け取りがたい。

さらに、枳殻垣を潜らせるということに、何かただならぬ気配も感じられ、それに応じて急迫した気分が付句「いまや別の」にひそんでいる。だから、「俳諧古集之弁」には「落人などかくまひ置る女の館へ、捕手の向へる風情ともみゆ」とあり、これに賛成する学者も多い。いかにも劇

的でおもしろいけれども、そこまで言わなくても、打越・前句の世界からの転換は十分にされていることであり、もともと、作者の去来はあまり芝居気のある人ではなかったようであるから、まず、普通の若い武士と、その愛人との別れの場と見てよいであろう。

27

いまや別の刀さし出す

せはしげに櫛でかしらをかきちらし

凡兆

(雑。恋。人情他)

(現代語訳) 遊里の朝帰りである。遊女が客を見送って刀を差し出すと、客はそれを受け取り、大あわてで髪に櫛を入れて帰ってゆく。

(付心) 向付。刀をさし出している女に対して、櫛で髪をかきちらす男を向いあわせたものと見たが、其人の付、即ち付句の主人公を女性と見る説もある。

女性説を取る根拠としては、櫛というものは元來、女性の用具である。ことに「かきちらす」というのは、「せはしく心いらだちたる女の姿」と見て、「海道又は山道の旅泊のおじゃれ飯盛」などの様とする説が圧倒的に多い。

けれども、この句を其人の付、すなわち、女性の姿を描いた句とすると、うき人を枳殻垣からくぐらせる人も、刀さし出す人も、櫛でかしらをかきちらす人も、全く同一の女となつて、俳諧に最も重要な「三句の転じ」がなくなつてしまふ。それではまずいのである。

この点、男性説を採用すれば「三句の転じ」ははっきりする。西鶴の浮世草子などを讀むと、当時の男性が櫛をもつたり、使つたりする場面がしばしば現われる。その一つの例として、「好色一代女」の次の文が参考になるのではなからうか。それは卷一ノ四「淫婦の美形」の一節、前の晩太夫から振られた客の朝帰りの状態を描いたところである。

かさねて寄添ふ言葉もなく、残念ながら人並に起別れて、髪を茶筌にほどき、帯を仕直し、分立てたるやうに見せけるこそをかしけれ

「分立てたるやうに」とは、前夜、遊女との間に情交があったかのように人に見せるため、乱れてもいない髪をこどさらほだいて茶筌髪にし、また帯も締め直して見せるのである。この話を逆にかえせば、遊女にもてた男ほど朝髪が乱れていたわけである。だから、大急ぎで帰ろうとする場合、遊女から櫛を借りてあわてでなんとか形を付けようとする。その有様を「かきちらし」と言ったのである。う。「かきちらし」の「ちらし」は動作の荒々しいさまで、いかにも朝帰りの男のあわてふためいた姿が、この言葉にあらわれておもしろく、これをたとえば「せはしげに櫛でかしらをととのへて」とか、「せはしげに櫛でかしらをかきなでて」などとしたら、この味は忽ちに失せてしまふだろう。

(付味・転じ・補説) それぞれ、付心の項で説明した通りである。

付勝練習二十韻

蓑虫

東明雅

投	句	締	切
7	月	20	日

十句目 すこし疲れて美術館出る
 十一句目見上ぐれば摩耶のあたりに雪しまく
 十二句目

治定 客待つ暖炉あかあかと燃え

1 こどもの列に從く親の列

2 ラガースクラム一塊となり

3 印つきたる助手席の地図

4 寒三日月はいつか消え失せ

5 寒影向ひあうて暮敵

6 切つて放てし鷹匠が鷹

7 頭剃り立て冬安居僧

8 黄金の屏風銀の月

9 煉炭あぐる焰むらさき

10 パートタイムの人を面接

11 毛糸編みつつ物思ふ人

12 母娘二人で守り来し機

13 時々腰を伸す紙漣

14 狸必死に呪文となふる

正雄 銳太郎

達子

銳太郎

元子

健悟

美和

智子

隆秀

徹

美代子

謙太郎

あかり

雄次郎

雅代

典子

澄子

※汁桶の」の巻に、「乗出して肱に余る春の駒」「摩耶が高根に雲のかゝれる」という付合があつたことを思い出した。「切つて放てし鷹匠が鷹」は「春の駒」の句に匹敵する力のある句で、付味も転じも十分である。ただ外の句である点がやや惜しいのは2と同様である。7「冬安居」は仏教徒が冬、一定期間、坐禅・仏書研究などの修行を行なうことで、それも若々しい僧らしいだけに、前句との付味・転じも十分であろう。ただ、三句前に「回教国は：」の句があり、これもやや釈教くさいのと、その句から人情の句が三・四句続き、この句を採用して、人情の句を続けると何かごたごたした感じになりはしないかと、それを恐れて結局捨てることにしたが、残念であつた。8 これも何とかして冬の月を、室内で出せないものかと苦労された句である。しかし、前句との付味はいささか問題があり、さらに、豪華な屏風は打越の美術館にさわるであろう。9 煉炭の焰の紫は美しいけれども、摩耶という地名と煉炭とはいささか位が違ふように思う。この焰はやはり何か世帯じみでいて打越の気分からも転じないだろう。10 これは人情自他半の句である。だから十句目の自の打越にはならない。しかし、7で言った通り、この人情の句は一句で終らず、たとえこの次に恋句でも来ると、何か人情の句がぞろぞろ続く可能性が出てくる予感がある。人情の句を続けることが一概に悪いと言っているわけではない。抜きさしならぬ人情の句の連続は、例の逆茂木として賞められるだろう。この場合、人情を続ける必然性がやや乏しいの

15 鶏雜炊をせがむ子供等
16 夫婦の味は湯豆腐の味
17 頬を真赤に押しくらまんじゅう

千雪
道郎
淳子

(応募受付順)

1 幼稚園か小学校の遠足を思わせる。子供を詠んだのは一つの目のつけ所だが、打越に「美術館出る」があるから、これは歩行体の打越であろう。2 前句の何かすさまじい迫力が移っている。響きの付けの好い例であろう。転じも付味も上々であるが、前三句が外の景であるので、なるべくなら今度は室内の景を付けたいのである。3 これは自動車の助手席の光景とすれば、一応内の景と見てよいであろう。よく付いてはいるが、「転じの点はいかがであるろうか。4 この巻初折の月は早々と第三で出てしまった。折が変わって前句が冬季だから、ここで冬の月を出すというのは、最も願わしいことである。しかし、前句に「雪しまく」(降雪に強い風の吹き添う現象)が付いているために、普通の月は出せず、ここが苦心されたところだと思う。それでも前句にびったりの句が出来たが、打越の疲れた沈んだ気分からは一転し得ていないのが残念であった。5 外は摩耶山の雪しまき、室内では寒々とした室に黙々と鳥鷲を戦わす二人、この句も付味は悪くないのであるが、打越の暗い気分が残っているようである。ここはやはりもっと明るい句を付けた方がよいと思う。6 この句も2と同じく、響の付けであろう。そう言えば、「猿蓑」の「灰※

ではあるまいか。11 早速恋の句であるが初折でも同じ所が恋句になっているから、この場合は避けたいのである。

12 この句は恋句とは言えないかも知れない。おもしろい、よい句であるが、これももっと先になってから出したい句である。13 紙漣は冬の季語、人情他で室内の景と眺向きであるが、「腰を伸す」はやはり疲れを感じているからであるろう。打越の「すこし疲れて」と差し合う。14 「昔は山に狐も狸も猪もいました。六甲山系にも随分沢山いました。木のうろや横穴に降りしきる雪が恐いのでおびえて呪文をとなえている狸の姿です。ずうっと真面目な句が続き俳諧の諧を入れたと思います」とお葉書にあり、私は読んで思わず吹き出してしまった。御趣旨はよく分り、狸もおもしろいが、おびえて呪文を唱えている姿は滑稽でもあろうが、あわれでもあり、打越の気分から全く一転とはいかないであろう。15 子供を出されたのはおもしろかつたし、三冬で室内で人情他で万事そつはないのであるが、このあとの展開が問題であろう。16は11と同じ、恋の句はもっと後に出すがよいと思う。17 「そろそろ子供を出し度いと思いました。他とも人情薄で場でもよろしいと存じまして」とお葉書にあった。子供を狙って出されたのは流石ベテランであるが、これは場の句にはならないでしょう。治定の句、三冬の場の句、室内と条件が揃い、付味・転じともに上々である。一句この場の句を挿んで、さらに新しい気分が続けていただきたい。次は雑の句、人情他・自己半・場、いずれでもよい。恋の句でもよい。

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第三十三回 猫蓑会

第三十三回猫蓑会は四月二十六日(木)、江東区亀戸天

神社社務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興

行、奉納し、そのあと、二十韻八巻を首尾した。

第一部 正式俳諧興行 「藤房や」一巻

第二部 二十韻八巻

(一) 役割

宗匠	脇宗匠	副宗匠	執筆	知司	副知司	副知司	座配	座見	花司	配硯	配硯	配硯	老長
中川哲	中島啓世	福井隆秀	式田和子	豊田好敏	副島久美子	内田麻子	内田麻子	山下元子	山崎一恵	原田千町	梅田利子	若尾よしえ	杉江杉亭

(二) 次第

一	席改め
二	席入り
三	配硯
四	献花
五	執筆登場
六	文台捌
七	知司挨拶
八	俳諧興行
九	花前
十	玉串奉献
十一	花の匂披露
十二	端作り
十三	吟声
十四	文台返し
十五	作品奉納
十六	知司挨拶
十七	退席

二十韻 藤 房 や

藤房や菅公五才のみづら髪

太鼓橋より亀の鳴く声

めかり時小半の酒たしなみて

ほつりほつりとファミコンを打つ

弦月のはや中天にビルの窓

誘ふ上司を拒む秋寒

べつたら市の逢ふたが運のつき

左へ行こか右へゆこか

円安をとめる手だては難しく

デロスのとかげペロリ舌出す

ハンモック子はすやすやとうまるして

樵の斧に木の香残れる

恋といふこと知りそめて縫ふ襦袢

異母兄妹と聞いてどうする

大白鳥ゆうゆうよぎる月天心

終の栖は村のはづれか

りハビリの誉められてをり夢の中

焼きおにぎりに醬油たっぷり

彌勒仏微笑給ふ花の陰

遠き山より春の暮れゆく

照れっぱなしの「宗匠」役 中川 哲

「柄(がら)にない」とか「舞台(いた)につかない」を絵に描いてしまったさまの宗匠役で、ひたすらお恥しい限りでした。昨年の芭蕉庵のときは、まだしも猫蓑会内輪の心易さがありましたけれど、亀戸天神への奉納正式俳諧興行のプレッシャーがかかりました。能の「翁」でいえば、三番叟にあたる執筆には儀式を敬仰する典雅性と軽みの演技を楽しめる遊戯性みたいなものがありますけれど、宗匠は「翁」役です。柄と貫禄で一座を締める、東ねの大役でしよう。一夜仕立てで勤めるのは、それこそ天神様の罰を蒙る怖れがあります。莊嚴にしつらえられた会場に、連衆が着座し、執筆、知司、花司のほか玉串奉献の神官さんまでが居ずまいを正されるなかへ、座配の麻子さんに導かれての「席入り」では足が震える思いでした。そのくせ、頭の中では「菅原伝授手習鑑」二段目「道明寺」の「なんと丞相、偽丞相」みたいな自嘲のセリフが勝手に渦巻いていたのです。自分のテレを、自分でごまかす裏返しのカタルシス作用かもしれません。

玉串奉献のあと、花の句を執筆の和子お姉さまに差し出したところで、ほっと一息。心のなかに、別の花の句が浮びました。

神罰を畏れぬわれや花の酔ひ

兎にも角にも、身丈に合わぬ宗匠役で、照れっぱなしの一時間。終ったあとの二十韻では本当に酔がまわりました。

千町 正江 明雅 清子 麻子 好敏 杉亭 弘子 久美子 啓世 淳子 あかり 文子 健悟 淑子 徒司 澄子 守男 執筆

藤祭り

東 明雅捌

藤房の

金久保淑子捌

藤まつり

馬場 彬風捌

一降りの雨に浄めて藤祭り	明雅	藤房のもつるる風や池小波	淑子	俳諧の古式床しや藤まつり	彬風
春惜しみつつ集ふ俳徒	則子	蛸蚪を掬ひて遊ぶ子供等	好敏	春の日傘のゆるる池の面	弘子
燕の巢老舗守る主健かに	志紅	春炬燵文房四宝とり出して	郁子	はらみ鹿手まねきすればうす目にて	利子
甘さ好みの手作り味の	治子	軒場近くに自転車車のベル	哲	石けりの子の独り遊べる	啓世
髪洗ふ窓に大きな月の出て	守男	虹残る山並にはや月昇り	ますみ	月涼しベッドタウンの屋根の上	房利
ニアミス承知隣女房	則	更衣して胸のふくよか	美奈子	冷房の間で電話待つ宵	弘
お馴染のバーのマグムも五六人	男	地廻りに冷かされるが愉しみて	哲	あの人の噂なんかは信じない	利
鉄鋼造船陽の目見え出す	則	ちよつと移つたハチ公の像	敏	男はロマン女ロマンス	弘
念願の領土返還いつの日か	紅	選ばれし宇宙飛行士夢多く	郁	宝くじ有楽町の列長く	同
テレビゲームに夢中なる子ら	治	いとよりの鮎俺の注文	哲	早合点はお家芸なる	啓
河豚ちりに晩酌の父上きげん	同	底冷えの木曾路で買ひし「七笑」	奈	日米の構造協議ままならず	弘
炬燵の猫がのぼせたと云ふ	則	社務所で習ふお神楽の振	敏	臘八接心寺は深閑	啓
背を向けて触れて触れざる床のなか	同	碧い瞳に黒目がからみ肩が寄り	み	西鶴は五十二才で逝きにけり	房
憤然としてガールフレンド	男	「金瓶梅」の手練手管を	哲	露けき野辺に誘ふ口づけ	啓
居待月漸くのぼる無人駅	治	高速のカーブミラーに映る月	奈	禁断の木の実を食べた月の夜	利
大和国原秋風のうち	紅	初雁の群ダムに下りくる	淑	駅のホームをすぎる秋風	房
身に入むや古寺巡礼も半世紀	雅	秋深く老絵師芸に掛くる魂	郁	エーゲ海翡翠の色の汐満ちて	啓
舌になれ来しコビー食品	紅	木植で叩く軽き腰痛	同	袋より出すかん入りの酒	弘
席占めて落語の花見賑かに	則	火を入るる花びらの舞ふ登り窯	敏	花の房愛でつながめつ八重桜	彬
根雪の消えて土の香れる	男	遍路の鈴の遠ざかる道	み	幼稚園よりのぼる風船	房

藤の盛り

篠原 達子 捌

藤 祭 り

蒲原志げ子 捌

藤 祭

八角 澄子 捌

匂ひ立つ藤の盛りや太鼓橋

そぞろ歩きの春惜しむ人

つぶらなる瞳の仔猫もらひ来て

読書に倦みて淹れしコーヒー

蚊遣香渦ときはぐす宵の月

小唄をうなる甚平の客

ずっけけもつじつま合はせ娘の世帯

年下の彼家事が得意で

NHK「翔ぶが如く」を見なくっちゃ

木曾「七笑」急便で着く

重文のお寺にさがる繭団子

ひびあかがりのお手伝ひさん

若先生こんなところで困ります

妻には愛のマグナム年金

ふるさとの月のかなたの渡り鳥

秋場所終へて綱に昇進

三枚におろすたちうを活きのよき

初孫生まれ知りそむる齡

渋滞の高速道路花明り

煙草くゆらすうららかな午後

達子

清子

光子

隆秀

清

秀

光

清

秀

清

光

秀

達

光

秀

清

秀

達

光

清

藤祭り押されて渡る太鼓橋

春の日傘を肩にお詣り

八朔をむきたる指の染まるらん

磨きこまれた低いテーブル

月の出に仏法僧も誘はれて

陶の枕を抱きてうたたね

家もありお金もあるがうぶ過ぎる

コンピューターで探すお相手

動く歯につい舌のゆく電話口

政治家がらみ相場上げ下げ

大家族石符鍋をつつき合ひ

古き曆に残る書込み

壁に貼るマリリンモンロー惱しく

悪ぶっている彼が大好き

新走りきき酒の猪口置いて月

ガレージセル冬支度する

かまへたる鎌の動かずいばむしり

人気なき浜続く足跡

タンDEM車山道行けば花吹雪

いななき聞ゆ仔馬親馬

志げ子

久美子

和美

和子

一恵

弘次

雅代

同

美

和

恵

美

次

代

恵

和

次

恵

美

弘

むらさきの袴姿や藤祭

調べゆかしく祝ふ春昼

つばくらめ巡行船をよぎるらむ

焼饅頭でお茶をいっぷく

女どちお餅舌やんで望の月

誰が寝る聞ぞつづれさせさせ

定家の忌式子が墓にからむ葛

ランバダダンス老も挑戦

反対の声もかすれし消費税

なんのかんのと酒のあと引く

かぜ気味の麒麟に長き貼り葉

名残りの空に気球はっかり

朝シャンの乾く間もなく抱かれて

嫦娥刺青羅に浮き

織ばたのはたと止りし浪の音

思へば須臾に過ぎし半生

一億円夢の温泉掘り当てぬ

ぐるぐる廻せ古き地球儀

筑波山花の霞のやはらかに

子等は並んでしゃぼん玉吹く

澄子

徒司

千町

麻子

よしえ

蓉子

町

蓉

麻

町

司

麻

司

町

え

町

え

司

麻

え

藤の香

中田あかり 捌

藤浪や

佛淵 健悟 捌

藤の香や帯胸高に君を待つ

切なく聞ける鶯鳥の声

遊ぶ子に山もつられて笑ふらん

信号灯の青になりたる

高層のビルの間に出でし月

夜食とりつつ文庫本読む

溢れ蚊の壁をたよりに飛ぶを見て

油滴天目木目天目

消費税婆の財布に小銭殖え

炎天に女も交る兵の墓

呼びとめられて占はれたる

人もなげ会へば必ず口喧嘩

結婚しないトレンディ族

寒栞のひびき消えたる三日の月

独り酌み居る吟醸の酒

坐り肝胝ストッキングを透けて見え

P T A のかけもちをして

花万朶汐騒こもる天主閣

群にまじりてすがる追ひ行く

註 すがる…蜂の古名

あかり

遊

篤子

正雄

杉亭

雄

子

遊

亭

雄

同

遊

雄

遊

子

亭

遊

子

雄

亭

藤浪や撫牛の瞳のやさしかり

橋桁の辺にゆらぐ糸遊

届きたるさよりに児等の集まりて

また同じ曲ピアノ弾きだす

空也忌の月皎々と昇りきぬ

銀座裏ゆくひとつかたかけ

十うん歳下の亭主を寝つかせる

揺り椅子に読むハードボイルド

オリエント急行曠野まっしぐら

往診かばん口あいたまま

すひかづら標札の文字よく読めず

単身赴任初めての夏

捨てることしがみつくとできぬわれ

腕に彫る名もやや寒の頃

赤城山こよひの月は鋭角に

風に吹かれて鴟の早賢

柚味噌なめあてがひぶちの老の酒

カメラカタログ縁に広げる

晴舞台つつがなく舞ひ花の袖

どんたく囃遠くなりゆく

健悟

正江

文子

淳子

同

文

江

淳

同

江

同

文

江

悟

江

淳

同

悟

文

淳

☆新刊紹介☆

★こんな場合はどうしましょう

式田和子著

女性のための冠婚葬祭入門

冠婚葬祭のしきたり、作法、テーブル

マナー、交際術…女性なら、誰もが一

度は読んで、おぼえておかなければなら

ない知恵とヒントがいっぱいあった本。

読者の母や祖母たちの賢い生活習慣が、

椅子式の現代にうまく適応するように書

かれている。

(三笠書房刊 定価一、〇〇〇円)

★芦洲庵句集と書留帖

内田 武著

山形県新庄市の北陽社重鎮内田素舟氏

が四十年間の俳句・連句の書留をまとめ

て出版された。連句は和漢・漢和も交え

十二篇。書留は「おくのほそ道」紀行三

百年記念の行事に関する人との出会い、

正式俳諧・風羅念仏など、貴重な資料を

集めている。連句人の必読の書。

996 新庄市鉄砲町三番七号

内田 武

胼胝は知っている

— 執筆始末記 —

式田和子

正式俳諧の第一回るとき、私は花司を勤めさせて頂いたのですが、そのとき、大きな坐り胼胝ができました。それが痛むのでなまじ貼り薬を貼ったのが災いして足の甲が腫れ上り、あわてて片方だけ半文多い足袋をあつらえたことでした。

— 閑話休題 —

この度『執筆』の大役を仰せつかりました。

文台を捧げて立つ。というただそれだけのことも年を取ると難かしいのです。普段のように「どっこいしょ」とはいえませんが、おまけに両の手はふさがっていて、バランスをどうしてとりましょうか。

さて立てたとしまして、左足から出るこの出方が、三番叟でいえば『翁』で出るのか『千載』で出るのか、『男』で出るのか、『女』で出るのか。落花の雪に踏み迷う交野の春の桜狩り（太平記）。本歌どりすれば、藤の花房ゆれゆる執筆の道に踏み迷

う、つまり、足がすくむのです。

昔々、踊りのお師匠さんがこわい人で、扇子でピシャッと舞台の板を叩いて、「出なきゃ始まんないんだヨ！」と叱られたことを思い出します。そうか、出なきゃ始まんないんだから『執筆』で出よう、と自分に云い聞かせ、坐っている足の裏からお尻の重心をちよつと移して、スクと立ち（たい）・スクと歩き出す（出したい）ための稽古。しかし、現実には、ただの『婆』で出てしまったのであります。

執筆の座につく迄の道のりはけっこう長いものです。小笠原流では『歩き十年』というそうできて、ただ、ただ、上体をゆらさずに頭の前から背骨に添って真直にして歩くのがお稽古だそうです。エーイ、小笠原じゃないんだからア……と、すぐあきらめてしまうのも私の悪い癖。

やつと執筆の座にたどりつきました。

連句は総合芸術で、森羅万象を一巻に読み込む奥の深い文学と思えますが、これを文台引き下ろすまでは、懐紙に書かなくてはならず、書くためには『字』という最大の難関が私の前に立ちはだかりました。手習いは、

「ふたつ文字から書きそめて、愜気恥かし角文字のお師匠さんのおっしゃったをほんに忘れはせぬけれど／矯んでみても情なや

長唄の手習子も反省しておりますが、私も『いろ』というふたつ文字あたりで手習いをたしなむのを怠たり、『にはへ』ぬまま年をとってしまひまして、まっとうな字も書けぬまま過ぎてしまったのです。その上歌膝で書くという、とんでもなく難かしいことはどうしたらいいでしょうか、と情なく、六十の手習でもと考えてもみましたが、昨日や今日の手習では追いつくことではありませぬ。弘法様、あたしや申し訳ありませんが筆を選ばせて貰いますとばかり、あの筆、この筆、サインペンとためしませんが、文字の本来本元、天神様がそのような小細工をお許しになるわけありません。若いうちに学ばなかったツケが今になって回って来て、大バチが当りました。

天神様、どうかご判読くださいまし。

奉納の二十韻は半分下俳諧がしてあります。名残の表からは連衆に「付」といって席から出て来て頂くのです。連衆の方々のタイミングも早過ぎず遅過ぎず、まことに

よく進行して頂きまして助かりました。また出句者も男性有、女性有、バラエティに富み、明雅先生門下の層の厚さが分り、けっこうな事と思いました。中にはちよっとう一直したいと申すのもありまして、これもパフォーマンズのひとつで変化がつき間も持たすことができてよかったですと思しました。

巻き上げた一巻は読み上げねばなりません。これを吟声と申します。

義太夫さんはお腹に砂袋を巻いてしっかりとさせ、腹の底から声を響かせてお出しになります。いなせな男は、切っ立ての晒をきりきりと巻き、いい喉嚨を切ります。

どちらでもできません私は、野暮の骨頂ですが、開腹手術をした人が巻く腹巻をペタリと巻きつけ、これで腹の当りから出す声をなんとか仕様と考えたのですが、ナイロンマジックテープ留めのやわなものでは、や

はり効果はありませんでした。

吟声には節があります。一節二声といえますと、浪速節のようですが、ハル、ユル、などの符丁もよく飲み込めままに本番となつてしまいました。吟声のお稽古がよくできなかったのは、本番に備えて腹に力が入らないので声を惜しんだせいもありました。吟声は、文章では伝えて伝えられぬこととでありますので、宗匠中川哲先生にお手本を吟じて頂き、テープに入れ、これが猫蓑式吟声という形式を作り、次の執筆をなさる方からは、それをお手本にして学ばれるのがよいのではないかと思しました。

猫蓑式といえば、前回正江様が袴姿で執筆をなさり、それがまことにお見事でございまして、私もそれに習はせて頂きました。それ以来、よそでも女性が執筆をなさるときは袴を召されたとか伺っております。古い伝統をいかしつづつ、少しずつ創意と工夫

を加えて、古式豊かなが現代にも通用する正式俳諧のお手本に猫蓑方式がなれば、素晴らしいこと、且、意義あることではないかと思ひます。

伝承ということからは、明雅先生のおはからいで、宗匠、執筆を始め数々のお役も交替で勤め、皆様が覚えていかれ、多くの伝承者の育つことは本当にけっこうなことと思ひます。

暫く入院しておりました間は眠っていた膀胱がむくむくと育ちました。坐り膀胱ではなくて、私のは正式、執筆膀胱でしょう。前記様々なおもいを何から何まで知っていた、肥やしにしてこんなに大きくなったのでしょう。不出来ながらもなんとかお勤めを終えました。お願いだから、へっこんでください。膀胱さん！

武翁賞廃止について

「季刊連句」では、創刊の昭和五十八年から武翁賞を設け、新しい連句の完成と新人の養成・発掘に尽力して来ましたが、平成元年まで六回を重ね、大方その目的を果すことができました。よって、今後、新しい企画で再発足すべく、その案が固まるまで一時賞を中止することに決定いたしました。皆様の御了承をお願いいたします次第であります。

歌仙 夏に入る 東 明雅捌

夏に入る水の匂ひや神田川

学生戻る新緑の街

伽羅露の色つやつやと炊き上げて

毛づくろひするぬれ縁の猫

夜席の呼び込みの声眉の月

道楽三昧うそ寒のころ

童形の観音像に秋袷

もらひ風呂呂して帰る子供ら

再婚を重ねることに若造り

スリッパさらと脱げば鮫肌

面食ひを戒めにして針仕事

肴ともかくまづは熱燗

寒月のいつとき軒にひっかかり

丸山応挙幽霊の軸

単穴旅の仮寝に覗き見る

オレンジの香の残るどこかに

飛行船マンボーのごと花の昼

先頭走者海市一瞥

千町

路子

達子

水壺

利昭

明雅

文人

達

昭

蓼艸

昭

町

壺

町

壺

町

達

艸

^{ナホ} 釉薬の調合代々口伝なり

わびるつもりでまたたてをつき

嬰ほどの重さの鴨をわたさるる

レーニン像に氷柱下れる

森閑と暗闇坂の大使館

午前零時に盗まれし唇

ドラキュラに似た看護婦はやや眇

蠍煎じて祀るまじなひ

過ぎしこと夢のごとくに更衣

黄ばみし写真辞書の中に

ロッキーマンの稜線を行く月の船

カーラジオより鉦叩き聞く

^{ナウ} 南無八幡頼みて秋を七十度

店仕舞する角の豆腐屋

ぼっかりと高級マンション灯りて

貝寄せといふ風の頬吹く

麻雀は東南西北花吹雪

次第に遠く遠く佐保姫

平成二年五月六日

於 関口芭蕉庵

昭町艸町艸町艸町人昭町壺町人艸町艸町艸町雅達艸町雅

歌仙 立春 中田あかり 捌

立春の雪握りしむ掌

パンの籠提げ下萌の道

うなり凧子等の歓声賑やかに

ひろげしままの読みさしの本

襖絵の月影淡くぼかされて

小袋作る糞虫の皮

角樽の新酒一対奉納し

ウエディングドレス仮縫をする

髭剃のシェーブの匂ひつゝい惹かれ

すんだこと皆糞に食はしよう

民衆の波のうねりが広場埋め

ねぢれねぢれしベンジャミンの木

紙のたも通げて金魚の泳ぐ月

蚊遣の行方屋一つ見ゆ

病棟の長き廊下をことごと

ところ構はず欠伸する婆

里内裏ありしと伝へ花おぼろ

晩霜予報流す有線

あかり

瑞枝

淳子

久美子

哲

千

同

枝

哲

美

淳

枝

淳

哲

同

町

淳

淳

浅刺汁ちよつと塩気を強くせむ

ごめんなんしよと坐るちゃぶ台

毛衣を着てまぎれなき血筋なり

個性的とはかなり我俣

就職はひとまづ置いて旅に発つ

キヤリアウーマンねらふ逆玉

甘えつつあかり消してと拗ねてみせ

しまりの悪き蛇口気になり

岩手県岩泉町字大戸

増長天の踏みつけし邪鬼

月照らす海に逝きたる人いとし

つばめ見送る駄菓子屋の軒

団栗をポケットに入れ中学生

アン・ドウ・トロワ・バレー・レッスン

熟年となりて覚ゆる山歩き

香港土産煙草くゆらす

花万朶西郷どんと犬の像

風船貰ひ揺れるボンシェット

平成二年二月七日

於 俳句文学館

淳 哲 枝 美 淳 美 町 枝 美 淳 美 町 枝 淳 哲

歌仙 花三千 矢崎 藍捌

空に満ち白木蓮の花三千

東風の匂ひをかいでゐる猫

潮干狩子ら賑やかな声たてて

映画もかかる村のイベント

望の月手づくりだんご召されませ

蟋蟀せせりのふと止みし濡れ縁

秋澄あきんで家紋くつきり大暖簾

越前行けば出会ひやさしき

おみくじを小枝に結ぶ細き指

間歌泉のごとき恋情

長堤を單車轟音ひとしきり

この世はとかく誇大広告

見上ぐればビルひそやかに夏の月

トヨタ祭の浴衣OL

折鶴を無心に折りて母病めり

柱時計の振り正しく

学友と久濶を叙す花の下

草餅分けし故郷の土手

志津枝

聖子

富佐子

鉦次

治子

慶子

好子

壹子

好子

聖子

慶子

正子

渥子

道子

渥子

枝子

壹子

次子

ブランドのスニーカー履き遍路づれ

芭蕉ブームのあとのむなしさ

待ちかねし本絶版のしらせくる

さらさらさらと雪はみぞれに

寒林のチェンパロの音はいづこより

ステンドグラス仰ぐ尼僧衣

純愛はすべてを越えて国境線

眼もと涼しき人に抱かれむ

あけがたの夢一面の罌粟の中

月うつつすらと鮭いろの雲

軽やかに犬と散歩の秋めきて

とれし枝豆塩加減佳く

流し合ふ背なにしみじみ老いの翳

二世力士の人気高まる

ハイテクの地球温暖すすむとか

蛇穴を出る裏の石垣

唐破風の波打つ街に惜しむ花

灘の日永の酒に酔ふらむ

平成二年三月二十日

於 棒の手会館

執

筆 藍 正 治 渥 富 壹 道 藍 聖 道 次 慶 聖 藍 好 聖 正

柏連句会

二十韻三卷

平成二年一月十四日
於 光ヶ丘近隣センター

初懐紙 東

明雅 捌

年新た

小林しげと 捌

東天紅

五十嵐讓介 捌

新しき人を迎へて初懐紙

和かな顔揃ふ松過

高級車ぬかるみの道避けゆきて

塾帰る子の鞆重たし

手作りのお月見団子卓上に

寄り添ふ声の身に入みるなり

捨扇女は皆悲しくて

不貞寝してゐる不器量な猫

明易し托鉢僧の鈴聞こえ

どの道とるも風薫る頃

糸杉のアルハンブラの丘にたつ

あきらめられぬあきらめし恋

貰ふだけ貰ってあとはずっぱかし

諭吉の逃げる足の早さよ

千鳥鳴く社の森に冴ゆる月

鮫鱈解いて酌み交はず酒

少年の夢はいづこに老いし吾

どこまで続く下萌の道

海こえて届ける友の花便り

舞ひたい気分蝶と一緒に

郁子

忠勝

洋子

英子

和久

和久

明雅

和久

展良

同

久

勝

郁

良

洋

英

郁

良

雅

勝

朝起や廿日目となる寒の内

春の待たるる脇床の壺

伍けりの童の声かさざめきて

路地に尾を振り犬も加はる

明鏡の月に左遷を気にもせず

天神様へ菊を供へに

どんぐりの転びころがる女坂

とまるところを知らぬ恋仲

ジーンズもベアールックにウォークマン

宗右衛門町は水を打たれて

そばを切るまに中伏の窓の月

男まさりの帯もきりりと

天国も地獄もなんぞ四畳半

般若波羅蜜多とも白髪まで

酒蔵のならぶ堀割旅館

雀の遊ぶお宿寺田屋

いそいと快気祝ひの膳仕度

ひひな祭りの歌が流れる

学び舎の庭に折しも花吹雪

山から山のうららかな雲

しげと

達子

ますみ

幸雄

み

と

子

雄

み

と

子

雄

と

同

雄

子

み

子

雄

み

東天紅初鶏を聞く神の杜

つれ立ちてくる着ぶくれの子ら

モーターショー海を埋めたて開かれて

ドリップコーヒー香り漂ふ

月光の病棟の窓顔を出し

乱れ萩にて独り占ひ

ほんのりと新酒に酔ひてもらす恋

フェイント攻撃ラインオーバー

北齊の空を打つ波なだれ落ち

らくがき帖にはさむ2B

夏帽子ひさしまぶしく楼蘭に

やせ猫歩くかれ井戸のへり

のつべらばう村のはづれに出たと云ふ

尼の衣の下は刺青

何もかもすべてゆるして凍る月

平成二年復員兵あり

トッカータ・パッサカリア曲奏す

紙雛飾る皺の手をのべ

故郷の左沢いま花盛り

丘に座れば石も暖か

政敬

正江

讓介

美津

江

津

同

介

敬

津

江

同

津

敬

津

敬

江

同

介

津

◇白金連句会

二十韻 若緑 下鉢清子 捌・文

学園に間近き庭や若緑

万佐子

そよ吹く風も弥生尽く頃

好子

賑やかに春の炬燵を囲みゐて

京子

じゃんけんをして分けるカステラ

芳子

月の出の鶴匠身支度清々と

さとる

ついで詣での谷波の寺

清子

こっそりとポストに落とす恋の文

好子

娘呼び出す赤きナナハン

万

とまり木に中年ばかり酒を酌み

る

山の狸に残飯を置く

芳

なまはげの通り過ぎしか雪の舞ひ

京

カプセルホテルいつも満室

る

想ひ寝の溜息ばかり羽根枕

万

婚約者連れ帰る小錦

芳

珊瑚礁立待月の曇りなく

京

ロザリオ祭の扉開かる

好

数ふれば打ち止んでをり鉦叩

芳

末は博士の夢も呆けて

万

千年の大枝揺るる花しだけ

清

帽子お揃ひ遠足の列

好

平成二年四月二十四日満尾

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

「連句ってとても難かしい約束事があるのでしょ。」「そんなに堅苦しく考えないで連想ゲームと思えばいいのよ。」「一人相撲で無く座の皆が考えるから。」

昨年秋、万蕃諏訪湖畔吟行会で、同室となつてしまったのが縁で、連句をやつてみたわね会が生まれました。大いに煽り立てたのは、連句と言うと頭痛薬服用と言われる北見さんとるさん、その尻馬に乗つてばかりいるのは私。掛け合い漫才式の瓢箪から駒が出て、堤京子さん・鈴木万佐子さん・高橋好子さん・小林芳子さん・北見さんとるさんと私の六人が、昨年十一月に初顔合わせ、明雅先生主張の二十韻を巻きました。夫々に句作歴〇十年の人達ばかりですの

で、雑（無季）の句に短句（七七）は、大いに調子が狂つてしまふ様子ながら、続くことに相成りました。 關春の四月二十四日は三回目、例会場の港区白金の高橋好子さんのお宅は、広い庭の木々もすっかり若葉に衣裳更えして、中央の松の木の花芽がこぞって天を指す。近頃とみに有名な聖心女学院近くのこの界限は、日中は人声も無く沈黙考には最適ですが、この連衆まことに理屈っぽく、この発句と

俳句とどう違ふのよ、などと屢々船頭を困らせています。

学園に間近き庭や若緑

万佐子

そよ吹く風も弥生尽く頃

好子

良い気分になつて参りました。つぎつぎと出される短冊、のんびり感心をして居りますと溜まる一方ですから、

賑やかに春の炬燵を囲みゐて

京子

じゃんけんをして分けるカステラ

芳子

裏の第一句目は月の定座、昨夏の長良川の鶴飼遊びを思い出したのはさとるさん。

月の出の鶴匠身支度清々と

さとる

ついで詣での谷波の寺

清子

鶴飼遊びのついでに、谷波村の結願寺華厳寺に詣でるのは、不信心の私の実体です。

さあ、一巡も済みましたのでこれよりは出勝、そろそろ艶めいた場を促すと、俳句のベテラン女史は恋は苦手でくすぐったい模様、「猫の恋」なら得意ですなども。

こっそりとポストに落とす恋の文

好

そうです。私達の恋は奥ゆかしくあつたのです。かくして苦闘二時間半、二十韻を満尾いたしました。もうちょっと理がわか

つたら、明雅先生をお招きして、あの神業のようなお捌きを体験といきましょう。

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

於 高橋好子宅

芭蕉連句に現われる経済のこと

福井隆秀

延宝八年冬（一六八〇年）三十七才の芭蕉は、パトロン鯉屋杉風の庇護で、曲りな

りにも深川芭蕉庵の草庵に落着くことができましたが、茶碗十、菜刀一丁、米を入れるひさご一つとあつては、正直のところ生活は逼迫していたに違いありません。

三年前に立机したとはいえ、門弟はそれ程の数ではなし、また点料を稼いだり、太鼓持ちまがいのご機嫌伺いをするたちでは全くないので、手許はいつも不如意だつたと思われます。

さてここで、延宝八年という時代を俯瞰してみますと、三十年前の慶安四年四月に家光が逝去しており、それより三カ月後に江戸八百八町を震撼させた由比正雪のいわゆる慶安の乱が鎮圧されています。こんな騒乱があつたというものの、十七世紀半ばを過ぎた日本をとり囲む情勢は、平和と安定、泰平の時期を迎え、従来の武断政治より文治政治へと時勢が移って、目まぐるしい商品経済の流通に伴い、これらを輸送す

るべく沿岸航路や河川の開発なども顕著になつてきていました。

勢い都市も人口は稠密に、情報と文化が集中したので、庶民の生活も見違える程活況を呈してきた時代です。ちょうど河村瑞賢が東廻り航路、西廻り航路を整備したのも九年前ですし、現金掛値なしの新機軸商法で、三井高利が江戸日本橋に越後屋呉服店を開いたのも七年前です。ちなみに後年「炭俵」に登場する野坡、孤屋、利牛らの俊秀は、この店の出身です。

また各藩の年貢米の販売市場として、江戸、大阪に中央市場があつて、特に大阪の堂島取引所は入札で全国の米相場を動かす巨大マーケットでした。

こういった経済環境のなかでは、剃髪隠居の身となつて風雅の道を買っている芭蕉と雖も、江戸市民のひとりとして経済に影響されぬ筈はない、と私は思うのです。そしてそれは、芭蕉の生活を如実に反映している連句作品にどのような形で炙りだされ

ているのだろうか。

延宝四年に巻かれた「時節さぞ」の第三に、桃青の号で、

店賃の高き軒端に春も来て

と、詠まれています。この時分は、日本橋小田原町の借家住いで家賃の高さを感じてもいたので生活感が一応出たのでしようが、春が来た喜びを店賃の高いのと軒の高さを言葉のうえで言い掛けた一つの趣向で、貞門から談林調に移行する生活体験に視点が向けられてきていますが、いってみれば言葉遊びの気味があつて、斬れば血の出るような切実な生活の実感はまだ出てきていません。また、この時期に作られた「梅の風」（百韻）のなかに、

慈悲はかみよりさがる米の直

という時の経済に触れた句を桃青は詠んでおります。米の値段の上り下りは庶民の生死に関わる重大関心事の筈ですが、これとでも、お上よりの慈悲として時折り米銭が町人にさがる、このさがるの言葉使いを

面白くひっかけて米価に結びつけた作為です。しかし、ここで修業時代の芭蕉が、風の文芸作品のなかに詩題になりそうもない米価などという経済現象を捕まえてきた観察は、大いに注目すべきことだと思われ

ます。

同五年「あら何共なや」(百韻)

あら何共なやきのふは過て河豚汁

桃青の発句で三吟が巻かれておりますが、この巻でも経済行為を詠みこんだ句は、百句中五句。塩売り、掛乞、鈴の音一貫二百、替せ小判などが散見します。替せ小判というのは、江戸、大阪間を為替手形で送る小判、為替金のことです。桃青は、

衆生の金をすくひとらるる

釈教を詠んでいます。私が救いとると、金を掬いとるとの言葉の単なる洒落で、生活上の金銭感覚の重味はないといつてよいでしょう。

といった次第で、延宝、天和時代の連句作品には、和歌や謡曲仕立てのべた付がかなり続く巻がありますが、経済のことはそう現われませんし、重要なテーマとはなっていない。

貞享に入って、いよいよ七部集の嗚矢で

ある「冬の日」が呱呱の声をあげます。さすがに談林風は脱して格調高い句々が示され、蕉風初期の萌しを見せてはおりますものの、故事や古典文学のパロディ化が目立ってロマンではあるが、肺腑を衝くような真実さはまだ見当りません。

読んで、春の日、阿羅野、ひさごと七部集が刊行され、その間元禄二年奥の細道の途次、東北、北陸の連衆と巻いた「森おふ」(那須)より「あなむざんやな」(小松)に至る全十二巻の歌仙にも経済事項は、至って少ない。

お断わりしておきますが、歌仙一巻のなかに経済を盛りこめなどという式目などありませんし、経済関係の句が全くなくなつて、連句作品自体の価値、評価にはならぬ影響も与えません。またこうした特殊事項だけに注目して連句を読むのは、正しい鑑賞法ではないと思います。

ただ私は、芭蕉の経済観念を覗いてみたい興味で、しつこくその跡を辿っただけで、他意はありません。

ところが、元禄四年の猿蓑に至ると、「市中は」の巻に、オ5で芭蕉の、

此筋は銀も見しらず不自由さよ

ウ折端 年に一斗の地子をはかる也。去来が出てき、更にそれより三年後の炭俵が刊行されるに及んで、「梅が香に」には、

オ4 上のたよりにあがる米の直 芭蕉

(前出は、さがる米の値でしたが、米相場に関心持っていたことがよく分かります)

ウ3 奈良がよひおなじつらなる細基手 野坡

ナオ8 ひらふた金で表がへする 野坡

ナウ4 未進の高のはてぬ算用 芭蕉

(延宝時代の遊びとは様相の違う、そこを斬れば血の迸る生活の密着した切実さ、

真実が窺えるではありませんか)

「空豆の」

ウ8 茶の買置をさげて賣出す 孤屋

ナオ4 置わすれたるかねを尋ぬる 孤屋

ナオ8 年貢すんだとほめられにけり 芭蕉

「振賣の」

発句 振賣の雁あはれ也ゑびす講 芭蕉

オ折端 割木の安き国の露霜 芭蕉

ウ9 紮買の七つきがりを音づれて利牛

ナオ7 算用に浮世を立る京ずまひ芭蕉

(ここにも、算用が出てきています)

ナオ9 どたくたと大晦日も四つのかね

ナオ11 中よくて傍輩台の借りいらぬ
越後屋の連衆と接触しているのですから、
芭蕉も日常の経済現象とは無縁ではなかつたのでしよう。

なお七部集最後の統猿叢には、「八九間」の巻他四巻の歌仙があつて、この集は芭蕉没後に編まれたものですから、芭蕉の句はそれ程多くはありませんが、ここでも経済を詠んだ場面をアトランダムにあげますと、
孫が跡とる祖父の借錢 馬寛／春無尽まづ落札が作太夫 馬寛／盆じまひ一荷で直ぎる鰯の魚 惟然／しまふて銭を分る駕かき 芭蕉／春風に普請のつもりいたす也 惟然等々結構あります。

王朝風俗や漢籍による古典風の濃密な作品が、七部集が年経る毎に軽みに移行してきて、その変遷には一巻のなかに経済現象が可成りの比重で現われてくるのです。つまり、フィクション、物語調ロマンの絢爛さより日常卑近のありふれた諸々の生活の実相に視線が移ってきた結果、必然的に庶民の生きざまに関わる経済が詠みこまれることになってきたのだと思います。

こういう観点から、軽みと経済現象との関連性を追及できるのではないのでしょうか。

雁帛往来

▽四月一日、午前中、富山市いたち川・松川の桜を見る。川を挿んで兩岸の花満開、午後は猿倉山に行く。この山全山かたくりの花咲き乱れ、さながら万葉の野に遊ぶごとし。

▽四月四日、午後一時より光ヶ丘近隣センターで正式俳諧の役員集合、リハーサルを行ない、下俳諧を作る。

▽四月七日、俳誌「笹」の原稿「連句の作り方」を書き上げ発送。

▽四月八日、柏連句会、雨烈しく参会者九名、半歌仙二巻首尾。

▽四月十一日、新宿御苑の桜を見る。染井吉野はすでに葉桜なりしも苑内の八重桜満開。午後A・C・C平成二年度第一講、序論・発句・脇について話す。

▽四月十五日、芦丈先生一十三回忌参会のため伊那からむし庵に行き、半歌仙を捌く。

▽四月十九日、電通連句部例会出席。

▽四月二十五日、A・C・C第二回講義。

▽四月二十六日、亀戸天神藤祭り奉納正

式俳諧興行。朝からかなりの雨が降り心配したが、やがて霽れ、藤も見頃であった。執筆の式田和子さんは病後にもかかわらず全く落ちついた堂々たる執筆ぶり、ことに吟声のすばらしさには一同感嘆した。あと八席に分かれ二十韻興行、めでたく行事を終了した。これは参会の方々、ことに天神社の方々のお力によるものと厚く感謝申し上げます。

季刊「連句」第二十九号

平成二年六月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二二 東方

電話 ○四七(七五)二九二

振替口座 東京七二五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六一

電話 ○四七(一七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

版 B6判

三五二頁
三五〇〇円

必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を並び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

- 〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景氣 五句目 差合 去 式目 四春八木
- 〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二二〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をストック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大二編 A5 六八〇〇円

国語慣用句辞典 白石大二編 B6 二二〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B6 三三〇〇円

日本語語源辞典 堀井幸以他編 B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 卓編 B6 三三〇〇円

隠語辞典 榎垣 実典編 B6 二八〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 藤井宗哲編 B6 二二〇〇円

新語俗語辞典 榎忠忠夫他編 B6 三三〇〇円

難訓辞典 中山泰昌編 B5 二二〇〇円

名乗辞典 荒木良造編 B6 二二〇〇円

名数数詞辞典 森 隆彦編 B6 四三〇〇円

あいさつ語辞典 奥山益朗編 B6 一七〇〇円

新版 こぼ遊び辞典 鈴木業三編 B6 五八〇〇円

類語辞典 鈴木・広田編 B6 二八〇〇円

類義語辞典 徳川・宮島編 B6 三三〇〇円

表現類語辞典 藤原与一他編 B6 四八〇〇円

新版 文章表現辞典 神島・村松編 B6 二二〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2